

音を聴き合うかわり合いづくり

「比べる」ことでせまる音楽の魅力 ～思いや意図をもって表現できる子どもに～

居澤 結美

本年度、音楽科研究テーマ<「比べる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～>に基づき、個人テーマとして1つは“強弱”を意識して「比べる」ことにして研究を進めてきた。子どもたちにとって音の重なりや速度、リズムなど多くの「比べる」要素がある。その中でも“強弱”は普段の授業や生活でとても馴染み深いものである。これを考えることで表現活動や自分の思いや意図を明確に相手に伝えることができるのではないかと考えた。またグループ活動を取り入れることで、子どもたち同士が学ぶ筋道をまず明確に認識し、それらを次の課題に活かし解決に向かえる（「学びをデザインする」）場を作り出していけるのではないかと考えた。

もう一つは「居場所ある学級風土」から、聴き合える学級をめざすために“無音の状態”を大切にしながら取り組みを進めてきた。

キーワード：リズムアンサンブル、音楽づくり、可視化（表現）、強弱、無音の環境

1. 研究目的

音楽科研究テーマ<「比べる」ことでせまる音楽の魅力～思いや意図をもって表現できる子どもに～>として、様々な比べる取り組みを行ってきた。

子どもたちは曲を聴くと“強弱”や速度、曲想の変化などがあることに気付き、どのようなものかという知識はもっている。しかし、表現するとなると難しい。

例えば、歌唱（「あわてんぼうの歌」教育芸術社）での範唱CDを聴き気付いたことを言う場面で「小さくなったり、大きくなったりするところがあった」と多くの子どもが答えた。しかし「どうして」という問いに対しては随分考え、それから「間違っただけで恥ずかしくて、“気が付いて帰る”ところは小さくなるんだと思う」や「似ていて、ばれたくないから小さくなる」と子どもが発言した。「ぼくは〇〇くんと違って、3回も忘れる子だからいつも忘れると思う。近所でも有名で本人もよくわかって、恥ずかしいと思ってなくて、ここは弱くなくて、強くっていかもって明るく歌うのがいいと思う」という子どもがいた。このように“強弱”に気付くことから自分の考えや意図が生まれていた。話し合い後の表現はとても豊かで前者の考えに近い子どもは「やっちゃった」という表情を浮かべ少し照れながら歌い、後者は少しおどけた表情を浮かべ歌った。最後に間違っただけが悔しいという思いをもったという子は、厳しい表情を浮かべ、こぶしを握りしめて歌っていた。このように自分の思いや意図をもつことは豊かな表現を生み出すのではないかと考えた。そのために、明確な根拠をもつこと、またかわり合いで自己と他者を「比べて」考えることができる。その中で自分の思いや意図を深めたりひろげたり、また

新たな思いや意図を生み出したりとより豊かな表現をすることができると考えた。

2. 研究方法

2. 1. 相手意識をもてる課題提示

自分やグループの表現がどのように相手に伝わっているのかを常に意識できるような課題を出すようにした。自分の思いや意図を明確にもち、表現できているようで相手には伝わっていないことがよくある。表現する側も聴く側も相手意識をもつことでお互いが理解し合えると考えた。

本実践では「自分たちの演奏にどんな工夫があるのかを聴いている友だちにも伝わるように考えましょう」という課題をリズムアンサンブルの途中を出した。普段はあまり意見を言わなかったり、手を挙げない子がいたりする。音楽だからこそ表現できるという子の相手意識を全体に投げかけながら課題提示もしていく。

2. 2. 無音の環境を意識する

4月当初から以下のことを伝えた。

- ①音楽を聴くとき、グループの発言・演奏を聴くとき友だち一人一人の発言・演奏を聴くときは静かに聴くだけでなく無音とする。
- ②手に持っている楽器があれば、手から離す。
- ③話を聴くときは当たり前だが静かにする。
- ④音楽だけでなくすべての教科でおこなう。

誰かが話すとき・演奏するとき、今行っていることの手を止めて、自分の心と体を相手に向けて聴くことは、相手を大切にしているという気持ちの表れである。また話している側にとっても、聴き手がそのように気持ちを込めて聴いてくれているという安心感と自分は

大切にされている存在なのだと感じられることで自尊感情が高まる。そのような雰囲気の中で子どもたちが学習できる環境が大切だと考える。「居場所ある学級風土」づくりとして特に意識して進めた。



図1 無音の状態でも集中して発表を聴く場面

2. 3. 強弱を意識する

鑑賞、歌唱、器楽、音楽づくりのどの場面でも“強弱”を取り上げた。なるべく教師から提示するのではなく、子どもたちから気付いたことで出たときに取り上げるようにした。歌唱（共通教材「とんび」）の時も「強く歌ったり、弱く歌ったりするところがある」と気付いた子どもから「どうしてそうするのか？」と返した。随分考えてから「向こうにいるのと、近くにいるのかな」、「小さいトンビと大きいトンビがいるのかな」、「1ぴきかな?」、「たのしげって書いているから、結構いる感じがするよ」など“強弱”から多くの考えや意図が生まれていた。その話し合い後の表現はとても豊かで、1匹だと感じている子は悠々自適に飛んでいるように高低を“強弱”で表し、多くのトンビがいると考えた子は「ピンヨロー」の部分でトンビたちが掛け合いをして話しているように表現していた。

また、国語の音読も“強弱や抑揚”に気を付けて取り組んだ。これは1学期の途中からではあるが、子どもたちから出たものである。教師が「今の音読でよかったところはありますか」と尋ねたときに「登場人物の気持ちやどどん落ち込んだから、この部分から少し声を小さくして強弱をつけて読んでいたところがよかったです」や「ここは音楽みたいに強弱をつけて読みました」など発言が多くあった。そこで“抑揚や強弱”という意識で本文から読み取り、明確な理由をもち、自分の思いや意図を表現していくことを音楽と合わせて行った。

2. 4. 指揮者をおく ～グループ活動～

1学期に行った「旋律づくり」ではグループでつくった旋律をよく聴き、楽しんで活動した。子どもたちは音を感覚で聴くことが多い。聴いて“おもしろい・楽しい・かなしい”などの表現が多いが、自分と友だちの感覚は大きく異なる。さらに「どこからそう感じたか」「どうしてそう感じたか」という根拠にも違いがある。その視点をもって本単元に取り組んだ。例えば同じグループのリズムを聴いても、ある子はトライア

ングルが耳に残り、それを中心に重なり合いなどを感じ取る。またある子はどの楽器ということではなく全体的に音色を感じ取る。それぞれの感じたこと・気付いたことを出し合い、工夫をすることで自分とは異なる意見や考え方と出合い、自分の中に取り入れていくことで自己を更新していく。また考えを伝え、話し合うことでかかわりを深めていくこともできる。グループでのかかわり合いを大切にすることで、友だちへの気付きが生まれてくる。

一方、子どもたちが指揮者をする中で強弱に対する表現の工夫が出てくると考えた。なぜなら、初めはリズムを打つことに自分自身が集中してしまうが、慣れてくると音の重なり合いや響き合いの工夫に自然と向いていく。音楽づくりにおいて、自分のつくったもの、グループでつくったものを友だちに発表するという機会は多くある。しかし表現する側の自分・自分たちはそれを聴くこと自体、また音の重なりや響きを感じたり、味わったりすることも難しいと考えた。その上で“工夫をする”や“感じたことを書く”も困難である。さまざまな難しさがある中で、グループで指揮者をつくり、自分たちの音を聴けるようにと考えた。そして指揮者によって、聴く視点が異なるのでそれぞれの思いや意図を共有することを大切にしていた。

3. 題材（学習活動）の実際

3. 1. 音楽づくり「音のカーニバル」

普段から子どもたちは音楽づくりの活動をとても意欲的に進んで行く。本題材の音楽づくりでは、いろいろな音を鳴らして聴き比べ、楽器の材質の違いによる音の特徴やそれぞれの音色の違いを感じ取りながら、おもしろい音の組み合わせ方を工夫する活動を進めた。材質だけでなく、演奏の仕方によっても音色が変化することに気付いて、お気に入りの音やおもしろい音などをみつけ、それぞれの音を聴き比べたり、強弱を工夫したりするなど、「どうしたらもっとおもしろい音を組み合わせになるか」というような課題をもって、いろいろと試しながら組み合わせていくようにした。

第1次では「バディネリ」（バッハ作曲）と「クラリネットポルカ」（ポーランド民謡）を聴き、曲全体の感じをつかんだ。楽器の音色や曲想など多くの気付きがあった。第2次では、「音のカーニバル」（教育芸術社）を歌い、その後手拍子でリズム打ちをした。その時点で「すごく楽しい」と楽しそうにしていた。グループで円になって手拍子を行うとさらに互いを見合って、リズムをとっていた。みんなでたたくときなどは「いくよ」と目で合図を送り合っていた。そのあとそれぞれ楽器を選んで、おもしろい音の組み合わせになるようにグループで工夫を重ねた。「どんな音のカーニバルにしたいですか」という問いに、「秋のお祭り」「七色の音」「キラキラ」など思いや意図をもっていた。ここでは、皮がはってある楽器、金属でできている楽器、

木でできている楽器をグループで自由に選んだ。練習を少ししてから次時では中間発表会をした。子どもたちはとても集中して聴き、それぞれのグループの発表に夢中になっていた。

木でできている楽器ばかり（木魚・なるこ・ウッドブロック2つ）を選んだグループは、「日本のお祭りのイメージで音が落ち着いているけど、楽しそうにしました」や金属でできている楽器ばかり（トライアングル2つ・すず・シンバル）を選んだグループは「音がどれも高くキラキラしている様子を表現しています」とそれぞれの音色の特徴をとらえて表現していた。また、3種類の楽器をつかって表現したグループは同じ祭りのイメージでも「たいこが入るとよけいに騒がしくなります」や「ボンゴが入ると外国の人がおどって



図2 “強弱”の違いを発表している場面

いる感じがします」といい、音色の違いによるイメージの違いを楽しんでいた。「七色の音」は種類ごとの音色とそれらが重なり合ってきた音色のちがいを意識してさまざまな音色があることをイメージしたとみんなに伝えた。それを聴いた子どもたちは「ほんとは、いろいろな音がある。おもしろい」と発言していた。いろいろな音色を聴き比べ、重ね合わせることを楽しんだ。グループの発表を聴いて、より思いや工夫が浮かんだようで「先生、まだしたい」「〇〇のグループのみたいなのをしてみたい」、「まだ新しいのがあるからしたい」とさらにめあてを明確にもち、意気込んでいた。考えた工夫や思いや願いを出し合いグループでまた練習を行った。鳴らす順番を代えたり、楽器を少し変えたりしていた。どのグループも友だちの演奏を聴き、自分たちと比べていた。「ぼくらと同じ楽器もあるのに、なんか違う」「あっ。打ち方が違うんだ」というつぶやきもあった。

ボンゴについて、一人の男の子は手で打ち、もう一人の男の子は打棒を使っていた。同じ楽器なのに打つもので音色が異なることに気付いていた。音を「ロザさんでみて」というと前者は「ボン、ボン、ボンッ」、後者は「ボン、ボン、ボンッ」と違いを表し、「じゃあこれも違うのかな」「これは似てたで」といろいろ気付きを発表したり、自分たちの楽器の音色にさらに興味をもったりしていた。様々な気付きをもちながら、「まだまだしたい」と言っていた。

3. 2. リズムアンサンブル

第3次ではリズムアンサンブルを行った。今度は自分たちで拍の流れにのり、リズムを打つ。金属でできている楽器、木でできている楽器、皮がはつてある楽器とそれぞれ担当を決めて行った。今まで自分がしていた楽器と異なるものを選び、新たな音色に喜んだり、少し戸惑ったりする子もいた。それでも今まで以上に楽しんでた。またリズムがすぐに打ちにくい子に「いっしょに打とう」「僕といっしょにしてよ」や「僕が1・2・3・4、1・2・3・4ってたたくから、〇〇くんは1の時と、次の1と3の時に打つん。いい？一回やってみよ」と自ら指揮者のように拍の流れをつくり教えている子もいた。はじめは自分のリズムを打つことに一生懸命になっている子どもだんだんと友だちのリズムや音色を聴いて、工夫することができてきた。

7つ目の1小節は即興的につくった。どの子もおもしろい音の組み合わせを意識して、「音色が聴きやすいように、おもしろくなるように、少しずれて音色が聴こえるリズムにしました」や「みんながいっしょのリズムをたたくことで音色が重なっておもしろい音のできたので、みんな同じリズムにしました」などそれぞれの思いや工夫を伝えながら、発表することができた。発表を聴きながら「①のリズムはよく聴こえるけど、②の金属でできている楽器は響くので他の楽器と重なってもよく聞こえます」など組み合わせで異なる音色のおもしろさに気付いていた。

研究会本時では、自分たちの工夫や練習を重ねた「リズムアンサンブルを聴いてほしい」と子どもたちの願いは高まった。しかし自分たちの思い（工夫や気付き）が相手に伝わるのかという考えまでに至っていなかった。そこでいつもなら、どこを工夫したのか、どんな思いがあるのかを伝えてから発表するが、何も言わず表現した。その後「いろいろな思いや願い・工夫をどのグループもしているけれど、みんなにそれが伝わりましたか」と問いかけた。ほぼ全員が首をかしげたので、「自分たちの演奏にどんな思いや願い、工夫がある



図3 グループの発表を聴く場面

のか聴いている相手にも伝わるようにリズムアンサンブルをしましょう」新たな課題を伝えた。これにより、再度自分たちの演奏を振り返りからどんなリズムアンサンブルにしたいのか、また自分たちの演奏の意図は相手に伝わっているのかという相手意識をもつことができた。

下記はその話し合いの授業記録である。

教師：どんな工夫がありましたか？
はる：こなつちゃんは一人の時は音を大きくして、
みんなでするときは小さくしてた。
あきこ：だいたいあってる。
なつき：はるくんと同じで、一人のところも1回目
と2回目はふつうで、4回目は大きくて、
5回目は小さくなった。
ふゆと：あきとくんが鳴らしていたら、あきこちゃん
は音を止めた。
あきら：たたくところが少し違った。
ふゆみ：そうなんやけど。
はるき：みんな、強弱をつけていた。
2班：正解！
みんな：おんなじ（強弱）こと言ってたやん。
2班：強弱って言って欲しかったんよ。



図4 工夫したところを話し合っている場面

4. 題材の考察

発表後「工夫した人」というと多くのグループがしたと手を挙げたが、「ではどんなところを工夫していたか分かった人」と伝えると、ほぼ手が上がらなかった。そこで、相手意識をもたせた課題を出した。上記の授業記録にあるように、「強弱」をとても意識して伝えたい、また表現を聴く側も“どこが伝えたいところなんだろう”と視点をもって臨んでいた。ただ、友だちの意見に対して「正解」というところで、豊かな表現を引き出すのであれば、「強弱」だけに視点がいったことは広がりにかけるのではないかと感じた。

常に自分たちの思いや意図をもって、楽器を選び、音を重ね合わせたことで、他の班の工夫を聴いた時に「自分たちはこうだけど、あの班は反対だ」と違いを比べ、さらに「たぶんぼくたちの思ったのと反対のこと考えたのかな」と推察することもできていた。

また無音の状況は常に子どもたちの集中を促していた。演奏をするとき、聴くときの緊張感がとても伝わってきた。併せて音を大切にしていた。

5. 成果と課題

指揮者をいれたことやグループ活動を入れたことは

とても有効な手立てであった。ただ指揮者をおくことで表現した音が手拍子で消えてしまうところもあった。指揮者をおくときは子どもたちの学習意欲が高まったり、相手意識を伝える時の手立てとなったりするので、体で拍を取ったりリズムをつかむために必要なことを考えてその在り方に工夫を重ねていきたい。グループ学習においては、課題の言葉を明確にし、視点のずれのないように教師が言葉を精選するべきだと感じた。

“音を聴き合うかかわり合いづくり”に対しての課題は、左記の授業記録から分かる。教師は“強弱”を発言した子どもに対して、「どうして“強弱”をつけたの？」という問いを返していない。この問い返しがあれば、子どもたちの意図や思いが表されたと考える。

“強弱”を知る、気付くということが最終的な目標ではなく、その工夫をした思いや意図の気付くことこそねらいである。それを深めていく教師の問い返し、また子どもたち自身からも「どうして“強弱”つけたの」などという発言があるかかわり合いをつくっていかねばならない。またそこから「ぼくたちも“強弱”をつけたけど、〇〇班とは違う理由だよ」と比べて考え、発言できるようになれば、テーマによりせまっていけると考えた。子どもたちが思い・願いをもち、他者のそれにせまれる手立てを考えていきたい。

無音の状態はこれからも続けていくことで、音楽だけでなく他の授業また学校生活面においても“けじめ”のある「居場所ある学級風土」づくりに有効であると考える。この状態の中でいる子どもたちは音を大切に作る心が生まれると感じた。音を聴き合うかかわりづくり”としての当たり前のことであるが、これをおろそかにしては決して成立しないことだと感じた。ただ教師がこの環境をつくっていくのではなく、子どもたち自身が「聴きたい」「かかわりたい」と思い、その空間を心地よいと感じ、作り出していきたいと考えられる題材を設定していくことが必要である。そして、そう願った子どもたちがその環境を作れる支援・手立てを考えていきたい。

参考文献

- ・文部科学省(2011)「小学校新学習指導要領解説」音楽科
- ・佐伯 胖(2010)「「学び」を問いつづけて
～授業改革の原点～」 小学館
- ・金本 正武 坪能由紀子 [編著](2009) 東洋館出版社
「小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり音楽」
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 (2011)
「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための
参考資料【小学校 音楽】」 教育出版
- ・公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 [編集] (2011)
「体験してみよう！実践してみよう！
これからの鑑賞の授業」 同財団
- ・鹿毛雅治・奈須正裕 [編集] (2010)
「学ぶこと教えること」～学校教育の心理学～ 金子書房